「ニホンアシカの最後の楽園」：竹島

1934(昭和9)年　竹島のニホンアシカ

1934（昭和9）年、今から86年前、大阪朝日新聞に「日本海のアシカ狩」という記事が連載されました。竹島（リャンコウ群島）で10日間取材し、写真をそえて、竹島の自然やアシカ猟の様子を伝えています。隠岐の島では竹島の漁業権を持っている人の住む久見地区なども訪問し、隠岐の島の自然や伝承についても取材しました。同じ年に大阪動物園で開催された「リヤンコウ島納涼展」では、アシカのはく製や、アシカ猟の写真、竹島の模型などが展示され、多くの人が見学に訪れました。

「日本海のアシカ狩」取材日程と関連事項

6月4日	取材班（本社記者 松浦直治、写真班 長谷川義一、大阪動物園技手 寺内信三（獣医））大阪を出発
	鳥取県境港から発動機船で隠岐の西郷へ
6月9日	西郷から発動機船神福丸（13トン）で竹島へ出発、船長は吉田重太郎、神戸の貿易商中田忠一も乗組む
6月10日	午前8時、島影発見（久見から12時間）、竹島に到着
6月12日	中田忠一、アシカ13頭を連れて竹島を出発
6月22日	取材班、隠岐の西郷に帰着 帰着後、白島（中村）、久見、都万を訪問、久見で八幡長四郎らにも会う
6月28日	新聞に「日本海のアシカ狩」の連載始まる、1回～11回（7月8日）、7月10日から「隠岐の濤声」連載4回（A～D）
7月6日	「日本海の海獣狩講演会」開催
7月下旬	リャンコ大王が仕留められ、はく製を製作
8月5日	大阪動物園内標本館で「リヤンコウ島納涼展」開催、はく製も展示、20日まで



日新聞

海の驚異盛つて
宛然！日本海の縮圖
大阪動物園に涼味呼ぶ
本社主催 リヤンコ展

「ウヘッ！大けえやッちやな」「馬よりでかいで」「なるほど急所の鐵砲傷に綿が詰めてあるわい」——噂とりどり、二百貫のまつ黒げな大王を仰いで、誰しもがチヨツと息をつめる——五日から蓋明けした大阪動物園における本社主催のリヤンコウ島納涼展、連れ帰つた海猫群もいまは立派な成鳥となつて、唯猫のやうな奇妙な鳴聲で囃したてゝゐる

長谷川本社寫眞部員が決死的撮影の寫眞三十葉を圍んで五彩けんらんたる大海の珍魚、怪魚數百點を描き出して涼味を呼び龍宮圖繪、但馬左津沖でことし捕獲した四十貫の大をさがめ、鎧着た三十貫の鐵鮫

岩田千虎
（いわた　かずとら）氏
（大阪府立農学校教諭で彫塑家）製作の竹島の大模型塑像

1934（昭和9）年8月6日大阪朝日新聞



昭和九年六月十五日（金曜日）

長谷川寫眞部員　寺内技手　松浦記者

壯烈・海の爭闘篇
龍宮の壯觀を思はす魚壘
絶海の無人島に"アシカ狩り"

怒濤荒れ狂ふ日本海の孤島に赤銅色の海の子が生命を投出しての海驢狩り——近く本紙上に"涼味以上"のこの新讀物を連載します

1934（昭和9）年6月15日大阪朝日新聞

生捕ったアシカ13頭は大阪に。
大阪動物園に5頭、阪神パークに8頭



孤島のアシカ狩り
初生捕りは十三頭
車中で赤ちゃんを生んで
大阪動物園と阪神パークへ

荒波の山と立ちくる日本海の直只中――押し寄せる海驢の大群を相手にいま勇ましい海驢狩り……本社記者松浦直治、寫眞班長谷川義一兩氏と大阪動物園技手寺内信三氏らの一行は島根縣穏地郡の孤島リヤンコウ群島で生捕りの壯烈な光景をペンにカメラにをさめつゝ原始生活を續けてゐる、近く一行の歸阪とともに鎖夏新讀物として

本紙上に連載される

が、本社の海驢狩り隊と協力して離れ小島で活躍をつゞけてゐた同島の漁業權所有者神戸の中田忠一氏はリヤンコウ群島育ちの海驢を一日も早く阪神地方の市民の前にお目見得させるために生捕つた海驢十三頭を檻にをさめて十二日孤島を出發、途中怒濤に惱みながら伯耆境港に無事上陸し特別貨車に積み込んで三日間の海と陸との旅をつゞけて十五日午前三時大阪梅田貨物驛に着いた

氷にかこまれ冷たい水を浴びせられながら元氣に大阪入りした海驢十三頭のうち仔をはらんでゐた牝海驢が途中進行中の貨車内で月滿ちて

可愛い

赤ん坊を生んだので中田氏大喜び……親はいづれも六尺ぐらゐ、五十貫餘の大きなやつでギヤアくとないて深夜の貨物フオームの靜寂を破り十數名の仲仕によつて三台のトラックに積まれ午前五時すぎまづ五頭は大阪動物園へ、八頭は阪神パークへ運送された

動物園ではさつそく新らしい海驢池へ入れ大きな目をキヨロくさせながら嬉しさうに得意の泳ぎをひとくさり……折柄入園者は『リヤンコウ群島で捕つたアシカや』と早くも大人氣、また阪神パークでも大きな池に威勢よく飛びこませ

一般に

お目見得――

こゝにはすでに五頭をりこんど一躍十三頭にふえたわけで大賑ひである

中田氏談

眞黒に日に焼けた中田氏は語る

『御社の人々らとゝもに孤島で飾などを食べてテント生活をしてゐました、記者の松浦さんも寫眞班の長谷川さんも元氣です、何分波が高いが海驢は一萬からをります、大凋で生捕つては次々に檻に入れますが丈餘の波に檻がさらはれさうになり相當苦心しました、第一回には十三頭生捕り汽車の中で一頭と今朝動物園で一頭、合計二頭仔を産み大成功でした』

檻から飛び出すアシカ＝大阪動物園

おりから飛び出すアシカ

《動物園では》
さっそく新しいアシカ池へ入れ大きな目をキョロキョロさせながらうれしそうに得意の泳ぎをひとくさり……おりから入園者は『リヤンコウ群島で捕ったアシカや』と早くも大人気、

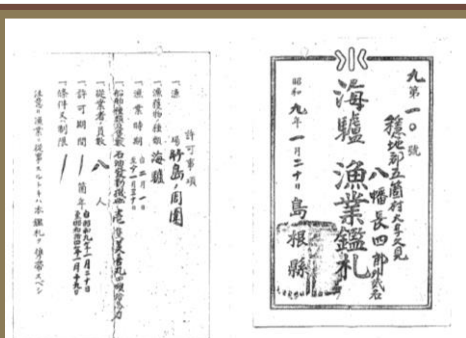
《中田さんの話》
「何分波が高いが海驢は一万からおります」

＊アシカが1万頭以上もいたことが分かります。

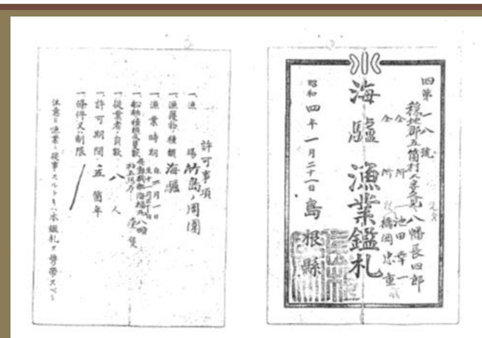
1934（昭和9）年6月16日大阪朝日新聞

＊大阪動物園は現在の天王寺動物園のこと、阪神パークは2003年に閉園。

昭和9年6月16日の新聞には「同島の漁業権所有者神戸の中田忠一氏」と書かれていますが、漁業権を持っていたのは、隠岐の久見地区の八幡長四郎さん、池田幸一さん、橋岡忠重さんの三人です。島根県から免許を受けた人に公布された「漁業鑑札」の写しが残っています。



1934（昭和9）年1月

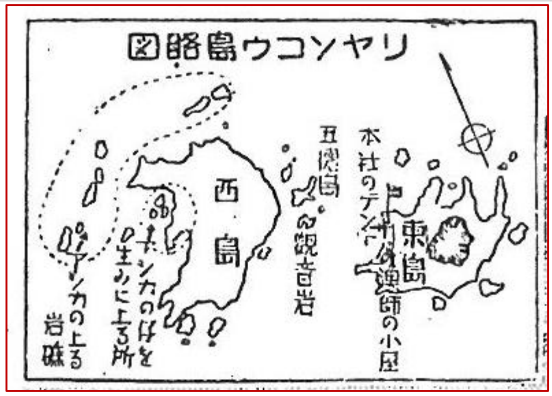


1929（昭和4）年1月

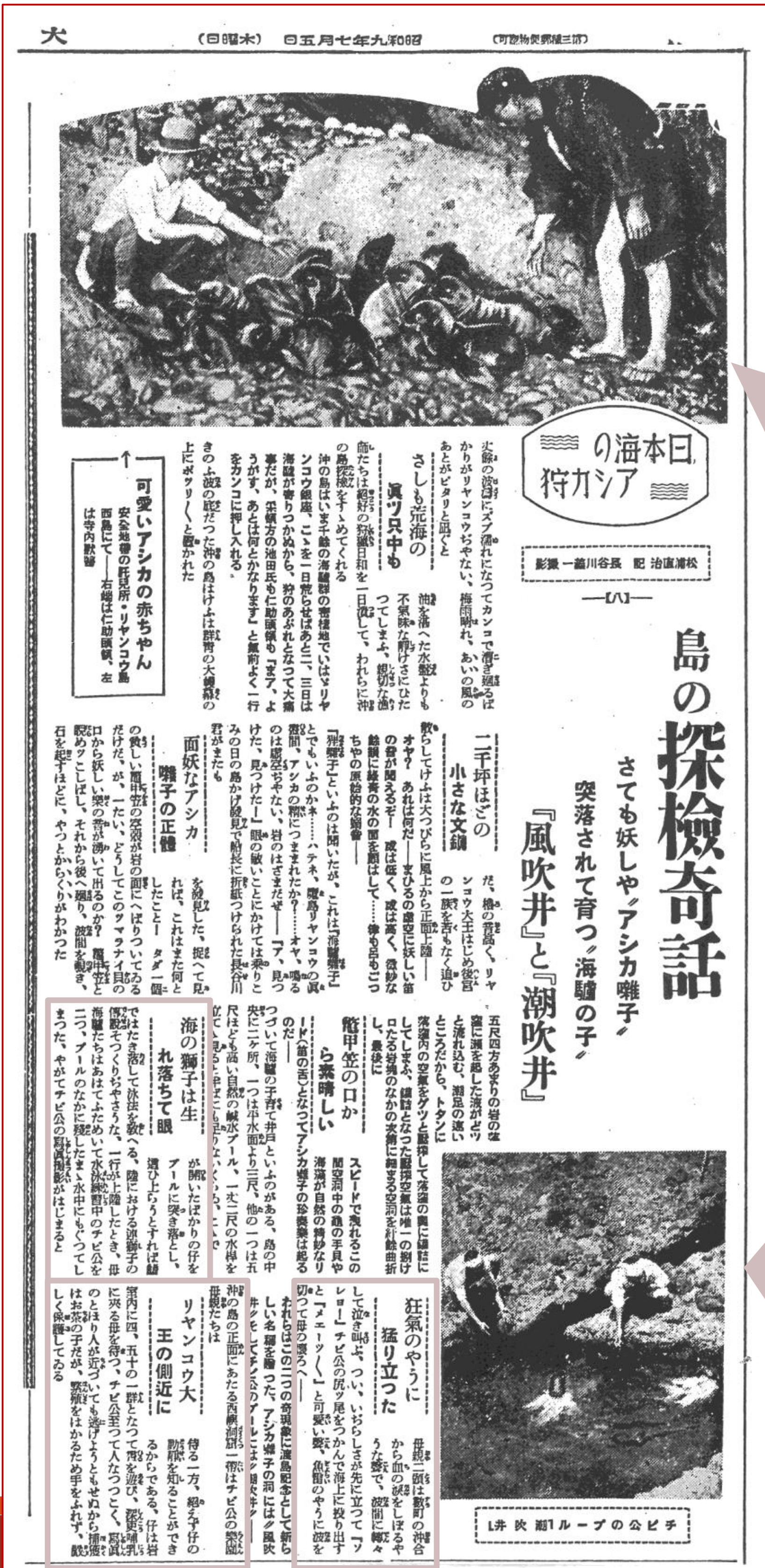
日本海のアシカ狩　連載代8回　　　　　　　　　　　　　　　松浦直治記　長谷川義一撮影

島の探検奇話　さても妖しや“アシカ囃子”　突落されて育つ“海驢の子”『風吹井』と『潮吹井』

竹島を探検していると、不思議な音が聞こえてきました。また、洞窟の近くに、アシカの赤ちゃんが泳ぐ練習をするプールのような水たまりがありました。



1934（昭和9）年6月29日　大阪朝日新聞
（連載第2回の挿図）


昭和九年七月五日（木曜日）

日本海のアシカ狩

松浦直治 記　長谷川義一 撮影

【八】

島の探検奇話

さても妖しや“アシカ囃子”

突落されて育つ“海驢の子”

『風吹井』と『潮吹井』

可愛いアシカの赤ちゃん
安全地帯の託児所・リヤンコウ島西島にて――右端は仁助頭領、左は寺内助手

さしも荒海の真ッ只中も

二千坪ほどの小さな文鎮

面妖なアシカ囃子の正体

海の獅子は生れ落ちて眼

艦甲笠の口から素晴しい

狂氣のやうに猛り立った

リヤンコウ大王の側近に

チビ公のプール『潮吹井』

1934（昭和9）年7月5日　大阪朝日新聞

（女島＝西島）沖の島の正面にあたる西嶼洞窟一帯はチビ公の楽園。母親たちはリヤンコウ大王の近くにいる一方、絶えず子どもの動静を知ることができるからである、こどものアシカは岩室内に四、五十の一群となって遊び、哺乳に来る母を待つ。チビ公いたって人なつっこく、写真のとおり人が近づいても逃げようともしないから捕獲はお茶の子（簡単）だが、繁殖をはかるため手をふれず、厳しく保護している

海の獅子（ニホンアシカ）は生れたばかりの子をプールに突き落とし、はい上ろうとすれば鰭ではたき落して泳法を教える。
取材班が上陸したとき、母アシカたちは、あわてふためいて水泳練習中のチビ公を二つ、プールのなかに残したまま水中にもぐってしまった。

母親二頭は数百メートルの沖合から泣き叫ぶ、つい、いじらしさが先に立って「ソレヨ！」 チビ公のシッポをつかんで海上にほうり出すと「メエーッメエーッ」と可愛い声、魚雷のように波を切って母の懐（ふところ）へ。

ニホンアシカはどこに？

日本の周辺には古来からにニホンアシカが生息していました。「日本書紀」や「出雲国風土記」といった古代の本にも書かれ、江戸時代にかけて「ミチ」「ミチノウオ」「トド」と呼ばれていました。
隠岐の、隠岐の島町の白島や、西ノ島町三度（みたべ）では大正時代（1912～1925年）までアシカ猟が行われていました。三度にはアシカを供養する「トド塚」が建てられ、今も地福寺の境内にあります。アシカ猟をしてその皮や油を利用したり、動物園で見る人を楽しませてくれたことへの感謝の気持ちが込められています。

島根県隠岐の島町の竹島はニホンアシカの繁殖地でした。竹島の女島（西島）の洞窟でメスのアシカは赤ちゃんを産み、育てていました。
1904（明治37）年に「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」を提出した中井養三郎は、アシカの保護の方法も細かく書いて提出しました。

1934（昭和9）年には1,000頭あまりはいたことが、当時の新聞記事からわかります。漁業権を持っていた橋岡忠重さんの記録では1941（昭和16）年まで、動物園やサーカスに売るために20頭前後を生け捕っていたと書かれています。その後日本人による竹島でのアシカ猟は行われていません。
1951（昭和26）年11月に境高校水産科の朝凪丸が調査に行った時には「アシカが100頭内外」いて、1953（昭和28）年、隠岐高校水産科の鵬丸も竹島でニホンアシカを見ています。
竹島に海洋警察隊が常駐するようになった1954年には、韓国の動物学者の報告をもとに、200～500頭が生息していたと言われていますが、1970年代半ばを最後に、その後は目撃されていません。

「海驢（アシカ）ノ保護方法」を考えた中井養三郎の願いはかなわず、ニホンアシカは竹島から姿を消してしまいました。

【隠岐郡西ノ島町三度にある地福寺と「トド塚」】

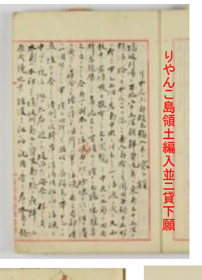






アシカの供養塔「登丶塚」(とどつか)＝トド塚

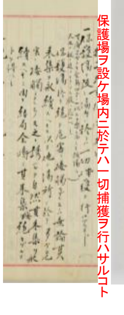
【1904（明治37）年9月29日　「りやんこ島領土編入並ニ貸下願」中井養三郎　／　出典：島根県公文書センター所蔵『竹島』】

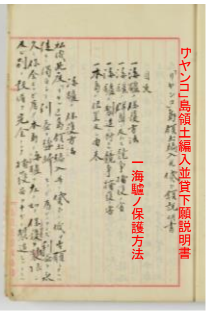






竹島の周辺を区切って、アシカを捕獲しない場所を決めていました。





ニホンアシカはどこに？
どうしてニホンアシカがいなくなったのか、それを考えることは、アシカと人間の関わりを考えることでもあります。わずかに残るニホンアシカのはく製標本や記録には、人間とアシカの歴史が秘められています。ふたたび竹島でニホンアシカの姿が見られることを願っています。